

ひとり親家庭の進学期待生成メカニズムの検証

—ふたり親家庭との比較を通して—

田邊 隆史 (秋吉ゼミ)

HS19-1039E

論文の目次

第 1 章 問題設定

- 1.1 はじめに
- 1.2 大学進学率上昇の背景
- 1.3 ひとり親家庭の教育達成における不利
- 1.4 研究課題
- 1.5 本論文における社会学的意義
- 1.6 本論文の構成

第 2 章 先行研究

- 2.1 学力研究のレビュー
- 2.2 進学・進学期待格差の先行研究
 - 2.2.1 親の教育期待形成
 - 2.2.2 子供の教育期待形成

第 3 章 データ、変数、仮説

- 3.1 本論文における仮説
- 3.2 使用データおよび調査の概要
- 3.3 分析に用いる変数

第 4 章 親の教育期待と子供の教育アスピレーション

第 5 章 子供の学力と親の教育期待

第 6 章 子供の学力と子供の教育アスピレーション

第 7 章 家庭内社会関係資本と子供の教育アスピレーション

第 8 章 子供の教育アスピレーション規定要因の検証

第 9 章 結論

[文献]

付録

論文の要旨

1. 論文の背景

日本において、大学進学という行動が近年一般的なものになりつつある。文部科学省が行った「学校基本調査」によれば 2020 年度の日本全体での大学進学率は 54.5%となっている。しかし、この大学進学率には世帯構造間で格差があることに注目する必要がある。厚生労働省の調査によると 2015 年時点でのひとり親家庭における大学進学率は 23.9%であり、日本全体での 51.5%に比べて顕著に低いことがわかる。さらにひとり親家庭においては大学進学を希望する子供の割合が低いことも明らかにされている。「令和 3 年 子供の生活状況調査」によれば、大学進学を希望する子供は全世帯において 49.7%だったのに対し、ひとり親家庭では 34.7%にとどまっている。進学を期待するか否かは実際の大学進学という行動に対し影響を及ぼすこと(正の相関)が明らかにされている(藤原 2011)。つまり、進学期待を規定する要因を明らかにすることで、ひとり親の大学進学の研究が前進する筆者は考えた。本論文では進学期待の生成メカニズムを明らかにすることを目的としている。

2. 先行研究

ひとり親家庭において大学進学率が相対的に低いことが明らかにされているが、進学期待を規定する要因はどのようなものがあるのだろうか。先行研究を確認する前に、親子の大学への進学期待をそれぞれ定義する必要がある。須永(2021)や吉川(2022)が親の進学期待を「教育期待」、子供の進学期待を「教育アスピレーション」としていることを参照し、本論文においても同様の定義をしている。

先行研究では子供の教育アスピレーションに対して親の教育期待が正の効果を持つこと(小澤 2019; 鳶島 2020)、学力が高いことが教育アスピレーションを高めることが明らかにされていた(鳶島 2016)。親の教育期待に対しては子供の学力(白川 2017; 須永 2021)、SC が正の効果を持つこと(荒牧 2019)がすでに明らかにされている。

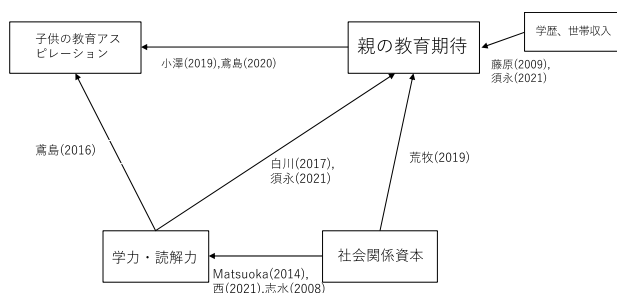


図 1 日本における進学期待規定要因の研究

3. 仮説の設定、分析結果

親の教育期待は子供の教育アスピレーションに対して正の効果を持つことが明らかにされているが(片瀬 2005; 小澤 2019; 鳶島 2020 など)、その多くはふたり親家庭を対象にした研究である。ひとり親家庭においても親の教育期待が子供の教育アスピレーションに対して正の効果を持つのかを検証するため、「親の教育期待が高いひとり親家庭で育つ場合、子の教育アスピレーションも高まる」と仮説を設定した。分析の結果、ひとり親家庭においても親の教育期待は子供の教育アスピレーションに対して統制変数を投入しても正の効果を持つことが明らかになった。また、世帯収入は子供の教育アスピレーションに対して有意な効果がないことも明らかにされた。

次に須永(2021)が学力と親の教育期待を高めることを明らかにしており、また、子供の教育達成に対しても正の効果を持つことも確認されている(白川 2017; 鳶島 2016, 2018)。そこで仮説 2 「ひとり親家庭において子供の学力が高い場合、親の教育期待が高まる」、「ひとり親家庭において子供の学力が高い場合、子供自身の

教育アスピレーションが高まる」(仮説 3)を設定した。仮説 1 と同様に順序ロジスティック回帰分析を行ったところ、学力は親の教育期待・子供の教育アスピレーションに対して正の効果を持つことが明らかになった。さらに仮説 1 と異なり、親の教育期待に対しては世帯収入(10%水準)や性別が有意になっていることが確認された。つまり、世帯収入や子供の性別など、教育支出をする親には家庭の属性が強く影響を及ぼすと言える。しかし、世帯収入などを考慮してもひとり親家庭において学力の効果があると明らかにされた点は新たな知見であると筆者は考える。

最後に社会関係資本と教育期待・アスピレーションの関連を検証した仮説 4. 「ひとり親家庭において、家庭内 SC が多い場合に子供の教育アスピレーションが高まる」の結果を確認する。社会関係資本が教育達成に対して正の効果をもつことが複数の研究によって示されている(荒牧 2019; 西 2021; 志水 2008 など)。分析の結果、ひとり親家庭において家庭内の社会関係資本が子供の教育アスピレーションに対して正の効果を持つことが明らかになった。

4. 結論

本論文から得られた知見をまとめる。本論文ではひとり親家庭において、学力や社会関係資本は親の教育期待・子供の教育アスピレーションに対して正の効果をもつのか、もしくはこれらの効果が経済的不利などによって打ち消されてしまうのかを確認してきた。その結果、学力や社会関係資本はひとり親家庭の教育達成に対して有意な正の効果を持つことが明らかになった。

前述のように学力、社会関係資本と教育期待・アスピレーションの関連は明らかにされたが、もう一点重要な知見が得られた。それは、ひとり親家庭において親の教育期待が子供の教育アスピレーションに対して与える影響度が強いということである。仮説 3 の分析の際に親の教育

期待の投入の有無でモデルを 2 つ作成した。その結果、親の教育期待を投入していないモデルでは学力が子供の教育アスピレーションに対して有意な正の効果を持っていたが、投入後には有意ではなくなった。パス解析による予備的な分析を行うと、学力が子供の教育アスピレーションに対して直接効果を持っているのではなく、親の教育期待を媒介した間接効果を持っていたことが明らかになった。これはふたり親における子供の教育アスピレーション生成と異なるメカニズムを持っていることが示唆される。

このひとり親家庭における親の教育期待が相対的に強い影響度を持っている現象は、ひとり親家庭において参考にする重要な他者が少ないことが原因ではないだろうか。片瀬(2005)が述べているように、子供は重要な他者からの評価をもとに教育アスピレーションを決定する。ひとり親家庭において子供の教育アスピレーションを高めるためには親の教育期待を高める必要があるのではないだろうか。

主要参考文献

- 藤原翔, 2011, 「Breen and Goldthorpe の相対的リスク回避仮説の検証——父親の子どもに対する職業・教育期待を用いた計量分析——」, 『社会学評論』, 62(1), 18-35.
- 吉川錬太郎, 2022, 「ひとり親世帯出身者の教育達成——親の教育期待と子の教育アスピレーションに着目して——」, 『人間科学研究』.